氏　　名		七 條 め ぐ み
学 位 の 種 類		博士（音楽）
学 位 記 番 号		博音第１１号
学位授与年月日		平成２９年３月２４日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版 ―楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ（1665/66-1722）に関する歴史、文献、音楽面からの研究― Les suites instrumentales issues des opéras de Lully publiées à Amsterdam : études historique, philologique et musicale sur l'éditeur Estienne Roger (1665/66-1722)
学位論文等 審 査 委 員		（論文審査及び最終試験）（愛知県立芸術大学） 主任指導教員　教　授　井 上 さ つ き 外部審査委員　教　授　石　井　明（慶應義塾大学） 外部審査委員　名誉教授　樋　口　隆　一（明治学院大学） （パリ＝ソルボンヌ大学） 主任指導教員　教　授　ラファエル・ルグラン（パリ＝ソルボンヌ大学） 外部審査委員　名誉教授　ルドルフ・ラッシュ（ユトレヒト大学）

学　位　論　文　の　要　旨

ジャン・バティスト・リュリ Jean-Baptiste Lully（1632 – 1687）のオペラは 17 世紀後半のフランス音楽を代表するものとして、彼の生前から死後に至るまで高い知名度を誇った。その影響力はフランス国内だけでなく周辺諸国にも及んだが、中でもオランダは、フランスに次いでリュリのオペラの受容が進んで行われた地域だと言える。オランダは政治・外交面ではフランスと敵対関係にあったが、文化面ではフランス語文学、哲学、絵画を享受し、同時に発信もしていた。同様のことが音楽でも言え、リュリのオペラは 1680 年代から 1710 年代にかけて、アムステルダムやハーグの劇場でフランス語だけでなくオランダ語でも上演された。さらに、オペラがさまざまな形態で出版され、他の地域にはない独特のリュリ受容の様相を呈していた。

楽譜出版においては、アムステルダムのヨアン・フィリップ・フース Johan Philip Heus（生没年不詳）、アントワーヌ・ポアンテル Antoine Pointel（1660 – 1702）、エティエンヌ・ロジェ Estienne Roger（1665/66 – 1722）が中心となり、リュリのオペラのスコアや、声楽または器楽用の編曲版の出版に従事した。とりわけ、彼らが出版した器楽用エール集――すなわち「組曲版」は、オペラの抜粋楽譜としてだけでなく器楽曲としても成立し、アムステルダムにおけるリュリのオペラ受容を特徴づけるレパートリーを形成した。組曲版はこれまでに、主にドイツの音楽学者シュナイダーによって、フランス・オペラとドイツの管弦楽組曲をつなぐ役割を果たすものとして評価されてきた。しかし、アム

ステルダムの出版者によるオペラの加工という観点からは、十分に考察がなされているとは言い難い。

本論文ではこの問題を扱う切り口として、アムステルダムの出版者ロジェの活動に焦点を当てる。ロジェはフランス・ノルマンディー地方のカンに生まれ、1696 年から 1722 年までの間に 600 点近くの楽譜や音楽理論書を出版した人物である。ロジェの出版活動の中ではこれまで、イタリア器楽の出版と国際的な楽譜販売が評価の対象となってきた。前者については特に、コレッリ Arcangelo Corelli（1653 - 1713）のソナタの再版や初版を手掛けたことから、コレッリ作品の受容と伝播において重要な役割を果たした人物と見なされてきた。後者に関しては、彫版印刷を用いて大規模な楽譜出版を行った最初期の人物として位置づけられ、出版物をアムステルダムだけでなく近隣の諸国、特にロンドンに向けて販売していたことに注目が集まった。

一方で、ロジェがフランスのプロテスタント教徒（ユグノー）であり、彼の楽譜出版全体の約 3 分の 1 をフランス音楽が占めていたことは、あまり知られていない。そればかりか、ロジェによるフランス音楽出版は、パリの初版譜を無断で再版した、いわゆる「海賊版」であるとして、後世の人々からは見向きもされなかったのである。上述したリュリのオペラの組曲版は、オペラの伝播と組曲史の観点から例外的に研究の対象となったが、組曲版がロジェの出版物全体の中でどのような意味を持つのか、また編曲を通じてどのような音楽的変化が生じたのか、詳細に検討する余地がある。

したがって本論文は、アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版の特徴を、ロジェの生い立ちと出版活動、カタログを活用した楽譜販売、出版者によるオペラの加工に注目しながら明らかにすることを目的とする。

論文は 3 部から構成される。第 1 部ではロジェの生涯と活動を、ユグノー書籍商としての側面に注目して論じた。まず、ロジェに関する 18 世紀以来の先行研究の流れを辿り、イタリア音楽の出版を国際的な規模で行ったという評価が誰によって、どのような根拠をもとに下されたのかを明らかにした。続いて、17～18 世紀のヨーロッパにおけるユグノーの立ち位置を考察し、ユグノーが離散を余儀なくされながら、国際的なネットワークを構築し、オランダにおいては比較的優遇された地位を得ていたことが見えてきた。また、出版業においてはアムステルダムの自由な環境にも助けられ、フランス語書物出版の立役者となっていたことが浮き彫りになった。第 1 部の後半ではこれらの社会背景を踏まえ、ロジェの経歴と活動を追った。その結果、ロジェは家族形成、組合加入、ライバル出版者との関係において、ユグノーのネットワークやアムステルダムの職業環境に大いに支えられていたと言える。また、ロジェが書籍商の協力を経て楽譜の販売を行っていたことから、彼の国際的な楽譜出版は、ユグノーのネットワークと書籍出版の販売手法が楽譜出版に応用された結果だと考えられる。

第 2 部ではカタログ分析を通じて、ロジェが楽譜出版において何を重視していたのかを考察した。ロジェのカタログは楽譜に掲載されるもの（1696 年～1701 年）、書籍に掲載されるもの（1701 年～1706 年）、独立した出版物（1708 年～1716 年）の 3 タイプに分けられ、これらの形態に応じて含まれる情報も変化する。また、1701 年に出版物の分類が始まったことで、カタログが出版物のリストから、出版者の意図を反映した宣伝媒体へと

変化したと言える。その間、カタログ上で出版譜の目玉商品として扱われたのが、リュリのオペラの組曲版とコレッリのソナタだった。ただし両者は全く異なる目的を持ち、コレッリ作品では最新作を美しく正確に印刷することが重視されていたのに対し、組曲版では、既存のオペラ楽譜を器楽曲の形に加工し、多数のレパートリーを誇るシリーズとして販売することに重点が置かれた。

第3部ではロジェによるリュリのオペラの加工に注目しながら、組曲版の音楽的特徴を明らかにした。まず、組曲版はフランスにおけるオペラの抜粋楽譜と同様の成立過程をたどり、アムステルダムの先駆者たちのモデルに依拠するものの、イタリア風の4部編成と調性を基準とする構造において、独自のレパートリーを形成していることが分かった。続いて、組曲版の構造と声部書法の分析を行うことで、編曲の特徴を明らかにした。その結果、ロジェはリュリの5部編成によるオペラを4部編成の組曲へと変化させる過程で、調性や曲の性格を基準とする曲順の入れ換えと、中声部の追加や書き替えを行っていたことが見えてきた。

このような考察を踏まえて、組曲版をロジェの人物・活動全体から捉え直してみると、リュリのオペラの組曲版は、フランスにルーツを持ちながら国際的に活動するロジェならではの発想に基づくものだと言える。同様に、カタログにおける組曲版の販売も、カタログの有用性を十分に理解した、ロジェの独創的な行いとして評価できる。

このようなロジェの独創性は組曲版の音楽的特徴からも指摘できる。すなわち、組曲版はその成立過程において、同時代のフランスにおけるオペラの抜粋楽譜と類似し、構造においてはドイツの管弦楽組曲と似ている。しかし、イタリア風の4部編成や、愛好家を念頭に置いた音楽の簡略化から、組曲版は必ずしもフランス・オペラとドイツの組曲をつなぐものではなく、フランス・オペラにイタリア音楽らしさを付け加え、ロンドンを中心とする国際市場に向けて売り出されたものではないかと考えられる。こうして、ロジェの組曲版は彼の商業的な手腕に支えられながら、リュリのオペラを器楽曲に変化させ、ヨーロッパ的な規模で広めていったと言える。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、愛知県立芸術大学とパリ＝ソルボンヌ大学とのコチュテル（博士論文共同指導）の協定に基づき提出されたものである。コチュテルとは、一つの博士論文を日本とフランスの大学の教員が共同で指導することにより、審査に合格すると、日本側とフランス側のそれぞれの学位が授与されるという制度である。この学位審査のために、フランスのパリ＝ソルボンヌ大学から主任指導のラファエル・ルグラン教授、フランス側の外部審査員として、オランダのユトレヒト大学からルドルフ・ラッシュ名誉教授のお二人に名古屋までお越しいただいた。また、コチュテルの規定にのっとり、日本側は外部審査員として、東京から、慶應義塾大学の石井明教授と、明治学院大学の樋口隆一名誉教授にお越しいただいた。

七條めぐみ氏の論文は、1695年から亡くなる1722年まで、アムステルダムで音楽出版者として活躍したエティエンヌ・ロジェによるリュリのオペラの「組曲版」について扱ったものである。本論文は日本語で書かれ、総ページ数は204ページ、フランス語版は要旨

とはいえ、総ページ数 136 ページ、およそ日本語版の 7 割のボリュームである。別冊の資料集は 114 ページで、これは日本語版・フランス語版に共通している。

七條氏は第 1 章で、ロジェのフランス的要素とフランスとのつながりについて論じている。ロジェはフランス出身のユグノーで、ルイ 14 世による大弾圧（1685 年のナントの勅令の廃止）の結果、アムステルダムに亡命し、そこを拠点として書籍・楽譜の販売を国際的に展開した。七條氏は先行研究で見られるエティエンヌ・ロジェについての情報を包括的にまとめるところに留まることなく、それを複数の重要な視点から検証することで、ロジェの出版活動について、過去の研究者が蓄積してきた知識以上に明らかにしている点が、高く評価された。特に、ユグノーであったロジェが、ユグノーの人々の間に存在していた、国を超えての交流が、いかに彼の活動にとって重要であったかという点は、必ずしも強調されてきたとは言えない。ユグノーの人々とのつながりが存在したからこそ、ロジェにとっては外国の地となるアムステルダムで起業することができ、そしてその後その地において、活発に出版事業に取り組むことができたということを明確にしたのは、論文の成果である。

第 2 章で、七條氏はロジェの出版カタログや新聞広告に注目し、彼がどのような意図を持って楽譜出版の事業を行っていたかということについて扱った。このような資料は、ロジェの事業の内容を明らかにするだけでなく、当時の人々がどのような音楽を求めていたかということを考察する貴重な資料となることを論文は提案しており、その点が高く評価された。

第 3 章で、七條氏は、ロジェによるリュリの舞台作品の編曲版については、音楽面から分析している。従来、これらの楽譜は編曲作品の出版ということもあり、編曲の手法などについての細かい事柄については、研究者はあまり興味を持ってこなかった。これに対して七條氏の論文は、作品ごとに編曲のプロセスを検証することにより、これまで大雑把にしか捉えられてこなかったロジェによるリュリ作品の編曲版について、多くの新しい情報を提供している。それにより、七條氏は、18 世紀初期の出版者たちがどのように仕事をしたかを明らかにしている。彼らが印刷したのは、必ずしも作品の「オリジナルの形」ではなく、当時の演奏家、つまり購買者に適した編曲された形だったのである。イタリア様式とフランス様式の比較は 17，18 世紀の西洋音楽研究でしばしばみられるアプローチであるが、七條氏が行ったロジェのカタログの分類の仕方の研究によって、美的分析では見落とされる可能性のある、商業的な論理という新しい観点が見いだされたことは重要である。

このように七條氏の論文は、18 世紀初期のヨーロッパにおける音楽出版の慣習を理解する上で貴重な貢献を果たしている。

なお、七條氏はアムステルダムで出版されたリュリ作品の編曲版とドイツの管弦楽組曲との関係については今後の課題としたいと述べた。審査員からはロジェの代理店がヨーロッパ各地に置かれていたことから、こうした国際的展開についても広く研究する必要性が指摘された。このように、本論文の研究テーマはさらなる発展の可能性を示唆する点が多く、それもまた本論文の意義の大きさを物語っている。

以上のことから、本論文を博士の学位に値すると判断する。

最　終　試　験　結　果　の　要　旨
この最終試験では、七條氏の学位申請論文の評価について確認を行った。七條氏の論文は独自の発想に基づき、複数の視点から一次資料と二次資料を適切に用いて行った、実証的で説得力に富むすぐれた研究である。 今後、七條氏が音楽学者として、社会に大きく貢献できる人材であることを確認して最終試験を終え、審査員全員一致で成績優秀であることを認め、合格と判定した。